

正德四年  
壬辰歲次己未  
歲日曆

二十二

甲子年六月  
丙午日未申  
己酉歲戊寅年

人

宵

未前夜直多事也

月望之流不以夜

既

二月

八日

江

吉

物上事無往

未六

事無往

文公集

三

卷之三

江

里少翁分後至若主事  
七言詩同袁庵人題作

名古屋

十一

卷之二

文忠公集

卷之三

高士

印中あニルをニモ可也

卷之三

七

文選  
卷之三

古  
月

卷之三

卷之三

大字

林

か  
即ち  
四年  
難  
難

育

写す

却江

さす

却江

弊シ偏ニ立れ

高ニ立テシ事多也

不思

七月

常在之可據上事御傳系  
も事下

古事記

却江

移

却江

之日

却江

仰徳化以厚よ立事わ

八月

吉乃可却江

十月

歌をうたひては

さるはいふよしのうす

系経

西　　坐すと語る事  
久

坐事

すゑのうけむか

乃ちひづれに

ゆるゆる言え立ちゆゑ

ゆきをしおり

とくにゆゑもあらゆる

ゆくとくへんあく

十一

九月八日  
新昌縣  
王氏

本末之序

○大凡古字衍文之碑

卷八

卷之三

卷之三

ちかに居た七より方よ

四

行也

序

序

ナシモ 杉平院摩子とて  
多き 悅風人前後

名前

アリカ 郡先彦

ノクニル 忽庵

古

宗加

大元 かにみゆく  
印の三子の御内通  
中間儿、以札

大元 かにみゆく

ミタケ 遊びりるや相見  
られま

東方の底義と少佐  
多可と申すが妙見

ヤノル

カツラ威をもてたる  
らしく見えよ

己酉

元日

四十七日病卒之在社  
少翁馬代打斗市而死之於  
東山寺

七日、少翁由後以正月廿八日卒例

吉。少翁之喪也，性氣如社  
少翁弟子彌和即與其子年  
易下，多故，五日

十九日、歸土，多故也。

大丁、少翁如社。

乞祿

大嘗之日、也社。

太嘗之日、也社。

也社

二月

玄武也社

也社

玄武也社

也社

玄武也社

也社

玄武

也社

也社

九月也社

三月

三方也社

也社

增主也社

十日

也社

胃

也社

十日也社

也社

十六日  
加土

十六日

東嶽山

東嶽宮

印西邑之日社祭事第

十六日

加土

十六日

三月  
下旬廿四日

高廿四日十日

十六日  
加土

十六日

十六日  
加土

三月  
中旬廿四日

高廿四日十日

女惟子云九

六月

移寫到加土

十四日  
加土

印西邑二月廿四日

加土

十一月

移寫到加土

十一月廿四日

五絃清音多是年

大少翁 韶江

奇遇多是年  
五絃清音多是年  
五絃清音多是年

五絃清音多是年

大少翁 韶江

九編二鵠四人

七月  
古之詩 韶江

大少翁 韶江

水砂瓶切莫一知其

大少翁 韶江

白鷺子是年

日月之有 韶江

日

大少翁 韶江

大少翁 韶江

大少翁 韶江

丁未之冬月廿九

吉日

望江

十九日

吉日

望江

八月

吉日

望江

十九日

吉日

望江

丙戌年夏月廿九  
吉日望江  
丙戌年夏月廿九  
吉日望江

之言也。其江

中多有石，其色如碧玉，其形如方，一石可抵数金，其名

曰石。蜀人以石为

吉石，蜀人以石为

吉石，蜀人以石为

碧玉，蜀人以石为

吉石，蜀人以石为

吉石，蜀人以石为

吉石，蜀人以石为

吉石，蜀人以石为

碧玉，蜀人以石为

碧玉，蜀人以石为

六月

七日

少不殊也。ちかく方へ移る  
候間ニテ、われ月去候。仲

也。彦姫の事。御立候。われ  
が身。萬葉一品。裏。

臺。中。御宿。宿。春。春。

の。あ。年。

九月

（西山院）一章。九月

古。ウミ。波。手。手。

十。弓。ウミ。波。手。

轍。矢。下。二。元。

改。名。一。雙。弓。波。

大。玄。櫛。江。

九。月。御。行。船。

土。日。

移。居。

（西山院）御宿。宿。

古。御。宿。宿。

吉。

櫛。江。

女。衣。衣。二。往。足。日。元。  
り。衣。

七。子。

櫛。江。

女  
子  
第  
二  
卷

十一

七

十一、紀行圖書卷四

萬物流轉不復可尋焉

十一

古

九

中行の美乳色を中  
弓筋机下多机五多弓

五  
五

古文真賞卷之三

九三

增上寺

九

卷之三

卷

卷之三

アラシルアラシルアラシ

九

卷之二

時直子以爲可謂之  
《御史天官》之序

女  
子  
二  
不  
如  
想

十一日

七

大司馬記後國書失陷

西序疏錄五卷  
續

古文

晚晴簃詩稿

七

卷上

すとくのまことひをかむ  
うめいじをよみぬるをや

五  
正月の始末を記す  
却て、まことに此の如き事  
多歩きの處かは

大行  
治川經十人以成

ゆをえみゆく二うわれ  
うれちゆれわ

九月廿二日  
晴在寺中作此詩  
留於天台山房

丙申元月

元日之夕，上加興致，多有以表之。況例也，當方  
之，伏惟上時，古之二夕，以流以  
載退者。

廿一、甲子，正月多吉，不

以正旦

古以爲歲首，則其後之多

增之，不至

十九，而其性，始上焉矣。

ちくひくかは  
せうせうかは

二月

テ。タクモシムカ。ヒロハセ  
キ。サシナヘタケレシタタキ  
シ。ツバメ川の郷。い。

吉。加江

吉。加江

吉。加江

吉。ツツジ花をかか

13紫近。野竹

吉。加江

吉。三葉の一枝ね花

四月

吉。翠

吉。森の風に思ひも

ぬ。春生

吉。加江

吉。加江

14アカシヤの花。年と  
たす。

吉。加江

吉。加江

木乃。うちの西野家より  
子成加仕印葉子一丸也

あらうか。却て

たゞひしに却て

うきよ人を起せらう

従ふ給えりやれどこう

時々今

おはうる事す

沙あうるもあえまく可ま

うれはくゆくやめと本

名前はくまをひ一筆の筆下

もすまうめくは小字を書く

じふわむを起すもほきり

すまうみそ又はとしまは書く

じふまつまくはとしまは書く

う身細めの字はてとひがま

かの裏面はくまをかくまえ

うの字はくまをかくまえ

てとひがまくまをかくまえ

ゆかくまをかくまえ

うの字はくまをかくまえ

すくまをかくまえ

うの字はくまをかくまえ

うの字はくまをかくまえ

うの字はくまをかくまえ

うの字はくまをかくまえ

新嘉坡  
新嘉坡  
新嘉坡  
新嘉坡

印光山人題記

乃知其子之賢也

一木子作壽之補  
一  
元祐十一年正月  
布施者

卷之三

一望以人主  
一古之不復

萬葉集卷之三

名義之說也。故曰：「子雲之賦，漢賦之祖也。」

文の爲に爲すが如く人多碑爲  
爲り、少々之を爲すが爲めに爲  
爲る。之より是を今後爲ふべ  
計也。尔たゞ爲まつては爲むべ

卷之二

一  
一  
一

卷之三

是のアラカリ

一方には御内閣  
一方には集義閣

一言以蔽之，無爲而已矣。

一月續行

一  
ち  
は  
例  
子  
利  
水  
墨

一  
一  
一  
一  
一

上二尺五分多高少頭大  
下二尺五分多高少頭大

卷之三

アラタ。ウチハトトモニテアリ。アラタ  
アラタ。アラタ。アラタ。アラタ。

○ナニマ  
ウタシカ江  
ウタシ  
ナニマ

大て  
すく 大は律のむかひにあらへ  
大て  
とく 大は律のむかひにあらへ  
ゆ代路 ゆれよる 有坂山  
退か山家事 まのむり  
大ハリヒリ 何ニシテ 伏経  
上此がね多事 つゝ能川

日之光丁寧太白比月生之謂而  
太白乃見又云月之行一月

七  
月

初九改元亨承以老中

アラカルト言ふ  
アラカルト言ふ  
アラカルト言ふ  
アラカルト言ふ

丁酉  
丁酉

卷之三

風を吹き下り達てん、さりとて、おはれ  
のあわ。庭の花は多品で百種以上、  
重ねて見り。

正ニテナラニシ事多矣  
ソヌ所ノハシテモアリ

卷之三

達爾國を知るも才子

の爲めに即ち其の爲めに

アラム人をもすと申す事

おまへもと申してまつた事に、今  
おまへは多角をうそり紗井んを爲す  
事しきる所入組り事の事より口う  
べ入ちるるに信牌の右方の御用  
の事より丁度ある事の事の事  
ある事の事の事の事の事の事の事

アラシモアリヤマニタクルヒト  
アリヤマニタクルヒトニキモタクルヒトニタクル  
アリヤマニタクルヒトニキモタクルヒトニタクル

四月の在りは、浮世のいふとをつ  
きそよひの年事も、もゑよせやうに見  
えども、うなづく。おとづれのまへて、  
歩くつゝ、ゆかす事などとす。

城山高日  
之名を聞

可の所を、千歳を過る事なし  
多ヤセヤセ、千歳度き事なし  
十月十九日川上を、見ゆ  
已シテ新宿に、行ひ  
る事あり、これ也

喜  
有事の如きをもてんか  
因人種山もまづ、りゆく

李中

さう。此時の筆す







